



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

A Survey on Childcare for Infants with Hypersensitivity.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 町田, 唯香, 橋本, 創一, 堂山, 亞希, 湊上, 真裕美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173453

感覚過敏のある幼児への保育に関する調査

町田 唯香*・橋本 創一**・堂山 亜希***・瀧上 真裕美**

(2019年11月25日受理)

MACHIDA, Y., HASHIMOTO, S., DOYAMA, A. and FUCHIGAMI, M.; A Survey on Childcare for Infants with Hypersensitivity. ISSN 1349-9580

The diagnostic criteria for the autism spectrum in the DSM-5 include symptoms other than sensations. Focusing on sensations, however, had facilitated investigating the problems related to sensations not only in children with autism spectrum but also in other children with similar characteristics, which has improved and enriched childcare. This study was designed to clarify the current state of daycare for infants with hypersensitivity, especially tactile hypersensitivity, and to identify difficulties experienced by teachers of such infants. Questionnaires were distributed and collected by post from 400 public nursery schools. Nursery teachers of classes for 5-year-old children participated in the study. A total of 186 responses were returned, which is a recovery rate of 46.5%. These responses were categorized by using the KJ method, which indicated differences between caring for children with tactile hypersensitivity and children with visual and auditory hypersensitivity. The difficulty in “environmental adjustment” observed in children with visual and auditory hypersensitivity was not observed in children with tactile hypersensitivity, such as reduced stimulation, which are difficult to manage. It would be necessary to change the perspective and the approach according to the type of sensory hypersensitivity experienced by a child when considering care for children with sensory hypersensitivity in the future.

KEY WORDS : Hypersensitivity, Tactile Hypersensitivity, Daycare for Infants

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

** Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University

*** Faculty of Human Sciences, Meiji University

1. はじめに

現在、保育の現場では「気になる子」への保育に注目が集まっている。気になる子の定義は、まとめられておらず、先行研究によって違う定義がされている。木原(2006)¹⁾は、保育者にとって気がかりに感じられる子を意味するとしており、日高(2008)²⁾は、発達障害児を

含めた、保育現場で保育者が気がかりになる子と定義している。このように様々な定義がある「気になる子」であるが、まとめると、発達障害と似た特徴を持ち、保育者が何らかの支援が必要だと感じている幼児だといえることができる。

そして、2013年にDSM-5が出されたことで、「自閉性障害」「アスペルガー障害」「特定不能の広汎性発達障

* 東京学芸大学大学院教育学研究科

** 東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター

*** 目白大学人間学部

害」「小児期崩壊性障害」が自閉症スペクトラムの一つの診断基準にまとめられた。自閉症スペクトラムの症状は、社会的情緒的相互性、非言語的相互作用、対人関係といった社会コミュニケーションの問題、非日常的な運動・言語使用・物体使用、日課と儀式、普通でない興味、感覚の異常といった興味・行動の問題に分類されている。本研究では、この自閉症スペクトラムの分類に用いられている感覚の異常の中で特に感覚過敏に焦点を当てている。Bromley (2004)³⁾は、自閉症児71%に音に関する過敏、54%に接触に関する過敏が見られたことを指摘している。感覚過敏とは、特定の感覚刺激に対して苦痛を感じたり、過度に否定的な反応を示し、そのような感覚刺激をしばしば回避したり、過度に警戒したりすることである(高橋, 2008)⁴⁾。例えば、触覚過敏でいうと、粘土、水、泥などの遊びを嫌がる・抱かれたり、手を握られたりすることを嫌うといった過敏さを指す。前田(2011)⁵⁾は、保育所において幼児が示す気になる行動の多くは、身体感覚の偏りを背景として説明できると述べており、保育所における感覚過敏への対応をより充実される必要があると考えらえる。また、岩永(2015)⁶⁾が、自閉症スペクトラム児の感覚の問題に早期から気付き、適切な対応を検討することの重要性を指摘していることから、感覚過敏への早期対応の重要さがうかがえる。本研究は、感覚過敏、特に触覚過敏のある幼児の保育・子育てに関する現状を把握し、そういった幼児の保育者の困難感を明らかにすることを目的として行った。なお、本研究における気になる子の定義は、発達障害等の診断を受けていないが、保育者が特別な支援が必要だと感じる子とした。

2. 方法

2. 1 調査期間

2018年1月に実施した。

2. 2 調査対象

1都5県の公立保育園400園の5歳児クラスの担当保育士を対象とし、その選出は各園に一任した。

2. 3 調査手続き

1都5県の公立保育園400園に質問紙を郵送し、配布回収を行った。

2. 4 質問紙の構成

質問紙の構成は以下の通りである。①フェイスシート(経験年数・回答時の担当クラスの幼児数、障害児(診

断または認定されている者)数、気になる子(保育者が判断する者)数,)、②触覚過敏について(その頻度5項目、触覚過敏のある幼児への保育において感じる困難や工夫について)、③視覚過敏または聴覚過敏について(その頻度2項目、視覚・聴覚過敏のある幼児への保育において感じる困難や工夫について)④気になる子が所属するクラスを運営するうえで感じる困難や工夫について。②と③の感覚過敏の頻度の尺度は、JSI-R mini(太田, 2002)⁷⁾を使用した。また、②と③と④の保育への困難や工夫については、自由記述での回答を求めた。以上のような設問を、「人に触られるのを嫌がる・汚れる遊びを嫌がる子といた気になる子」(該当児がいない場合は、行動・情緒面で気になる子)を担当するクラスの中で1名抽出して、その対象児について回答するよう求めた。なお、質問紙の冒頭において、「気になる子」「感覚過敏」について先行研究にある定義や具体的な症状・行動を簡潔に明記した。

2. 5 倫理的配慮

質問紙を郵送した際に、研究倫理を遵守し、得られたデータは統計的に処理し、所名や個人が特定されないことを明記した調査依頼書を同封した。調査用紙への回答をもって調査ならびに研究結果の発表について同意が得られたものとした。そのうえで、個人情報に十分留意し、倫理的配慮を行った。

3. 結果

3. 1 回答者と担当クラスの状況

186件の回答が得られ、回収率は46.5%となった。回答が得られた保育者の平均経験年数は16.9(SD=9.1年)であり、担当クラス(5歳児)の幼児数は平均20.9(SD=6.3)人であった。そのなかで障害(診断のある)児は、平均0.9(SD=1.1)人、気になる子は平均3.1(SD=2.5)人という結果であった。「人に触られるのを嫌がる・汚れる遊びを嫌がる子といた気になる子」(該当児がいない場合は、行動・情緒面で気になる子)を抽出して回答された対象児の中で、何らかの感覚過敏があるという回答は162名であり、全体の87.1%となった。感覚過敏の内訳は、図1の通りである。この何らかの感覚過敏があるという回答を用いて分析を行った。

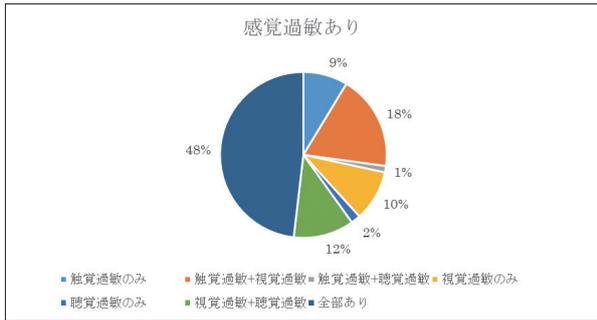


図1 感覚過敏の内訳

3. 2 自由記述のカテゴリー分け

自由記述での回答を求めた「触覚過敏のある幼児の対応の際、他の子と比べて保育をする上で感じる困難、対応の工夫」、「視覚・聴覚過敏のある幼児の対応の際、他の子と比べて保育をする上で感じる困難、対応の工夫」そして「触覚過敏や視覚・聴覚過敏のある幼児を含めた気になる子が在籍するクラスを運営していく際の困難」について、その記述をKJ法によりカテゴリーに分けた。「触覚過敏のある幼児の対応の際、他の子と比べて保育をする上で感じる困難、対応の工夫」と「視覚・聴覚過敏のある幼児の対応の際、他の子と比べて保育をする上で感じる困難、対応の工夫」は同じカテゴリー名で分けることによって比較できるようにした。

保育する上で感じる困難は、①パニック時の対応②集団参加・他児とのトラブル③環境整備の限界④対象児理解⑤その他の5つのカテゴリーに分類することができた(図2, 図3)。

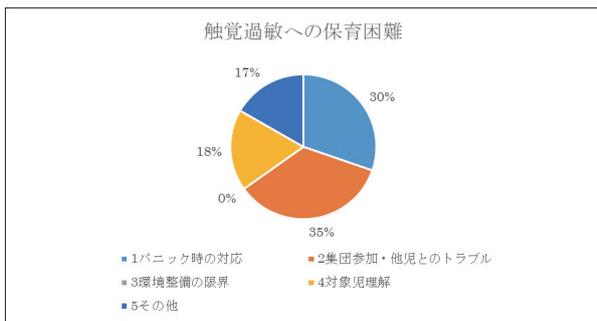


図2 触覚過敏への保育困難 (n=66)

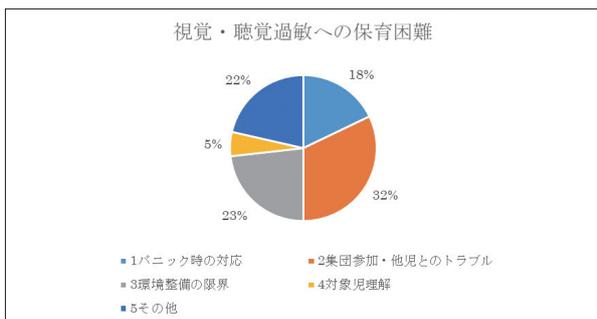


図3 視覚・聴覚過敏への保育困難 (n=56)

また、対応の工夫は①環境整備②明確な説明③強要しない④保育者協力体制⑤その他の5つに分類した。その割合は触覚過敏と視覚・聴覚過敏において全く一緒の割合という訳ではなく、それぞれの特色が見られた(図4, 図5)。

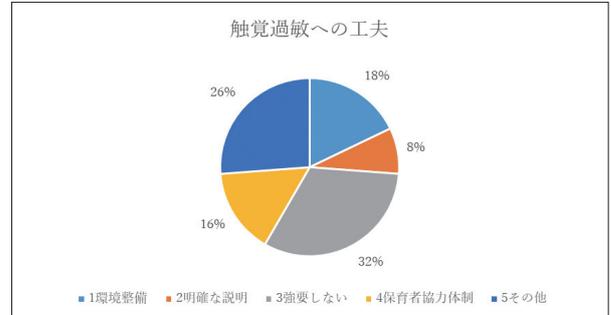


図4 触覚過敏への保育工夫 (n=84)

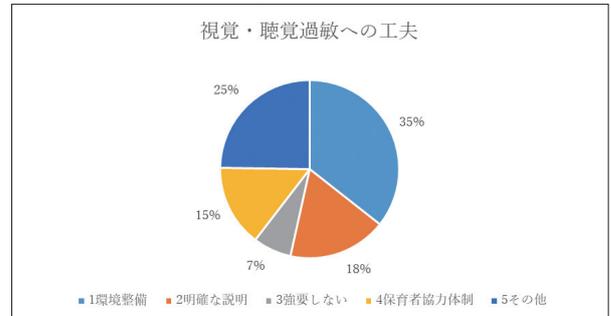


図5 視覚・聴覚過敏への保育工夫 (n=101)

次に「触覚過敏や視覚・聴覚過敏のある幼児を含めた気になる子が在籍するクラスを運営していく際の困難」の困難な点については①活動の進行②他児との影響③職員体制の限界④その他の4つに分類した。工夫点は①クラス全体での理解②園内での連携③環境の整備④その他の4つに分類することができた。クラス運営については、困難の記述が圧倒的に多いという結果になった。

3. 3 感覚過敏への保育の困難・感覚過敏への保育の工夫KH coder

更に自由記述を分析するために、フリーソフトKH coderを使用して感覚過敏への困難・感覚過敏への工夫についての自由記述を分析した。

感覚過敏への困難(触覚過敏への困難と視覚・聴覚過敏への困難)において共通して多く見られるのは、「対象児」と「他児」という単語であった。特に触覚過敏においての関係性が強い。また、その触覚過敏において、環境にアプローチするような単語が視覚・聴覚過敏に比べて少ない。対照的に視覚・聴覚過敏においては「刺激」「生活」「環境」など環境にアプローチするような単語が

多く見られる。(図6)

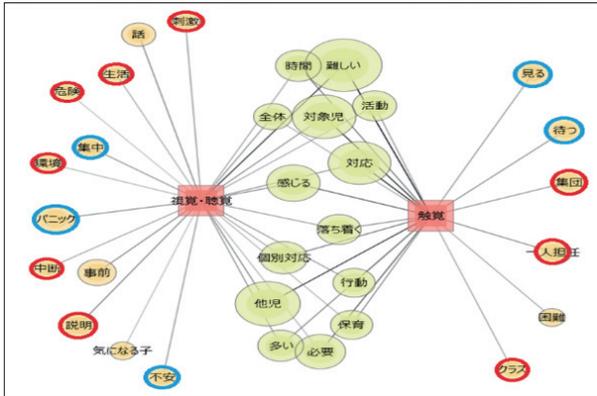


図6 感覚過敏への保育の困難KH coder (n=126)

次に感覚過敏への工夫（触覚過敏への工夫と視覚・聴覚過敏への工夫）についてである。触覚過敏、視覚・聴覚過敏に共通して「対象児」が抽出され、関係性も強く見られた。また、特に視覚・聴覚過敏において「説明する」「刺激」という刺激に慣れさせるような工夫としての単語が多く抽出されている。しかし触覚過敏では、「待つ」「様子（を見る）」といった対象児の情緒面に対しての工夫に関する単語が抽出されている（図7）。感覚過敏への困難、感覚過敏への工夫両方において、多くの共通した語が抽出された反面、触覚過敏、視覚・聴覚過敏それぞれの特徴を示すような単語も抽出することができた。

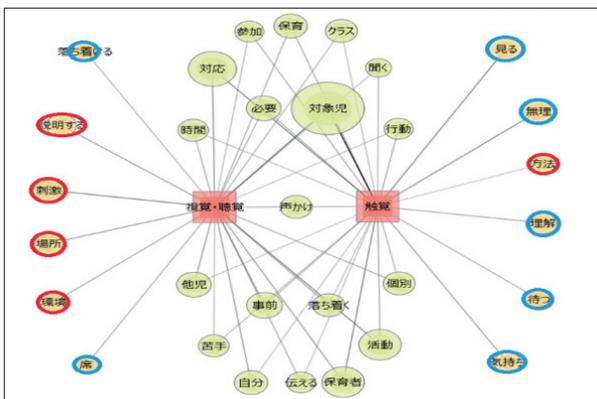


図7 感覚過敏への保育の工夫KH coder (n=198)

4. 考察

経験年数の偏りはなく、気になる子や感覚過敏への困難さは若いから抱える困難感という訳ではないことが分かる。ベテラン、若手関係なく感覚過敏のある幼児への保育に対し困難感を抱える可能性があると言うことができる。また、担当クラスの気になる子の人数が平均3.1人となっており、気になる子への支援をより充実したもの

にしなければならないことが分かる。

KJ法のカテゴリー分類やKHcoderの分析より、触覚過敏と視覚・聴覚過敏の間で、その保育への困難や工夫に違いが見られた。感覚過敏のある幼児を保育する上で感じる困難では、「環境整備の限界」に焦点を当てたいと思う。触覚過敏において「環境整備の限界」は0%となっており、視覚・聴覚過敏の22%とは大きな違いがある。視覚過敏への対応としては、壁画や掲示物を減らす、聴覚過敏では大きな音のなるものを使用しないなど環境を整える方法が多くある。そのため、そういった対処の難しさや限界を感じる人が多いのだろう。しかし触覚過敏では、そういった刺激を減らすといった対応がしづらい。「対象児の理解」の割合からも、どの感触が不快なのかということが想像しにくいことも分かる。そのため環境整備の限界という所までたどり着かないのではないだろうか。また、その工夫点については、「環境整備」と「強要しない」というカテゴリーに注目する。保育への困難と同様に、工夫点においても「環境整備」に関するカテゴリーに違いがみられる。触覚過敏より視覚・聴覚過敏における環境整備の方が手を施しやすく実行しやすいということが分かる。「強要しない」のカテゴリーは視覚・聴覚過敏の方が圧倒的に少ない。視覚・聴覚過敏は触覚過敏に比べ改善が目に見えやすいため、少し我慢させ刺激物に触れさせると、前より改善している、次はこれくらい大丈夫だろうという推測が立てやすいと考えられる。また、刺激物の量が調整しやすく刺激物に暴露させる際に意図的にその量を増減し、過敏さの改善に導いていけるのだろう。しかし触覚過敏について考えてみると、刺激量の調節が難しい。水や砂などの刺激物の量は調整可能であるが、服やタオルなどといった生地への過敏さが現れた場合、その服を着せない、そのタオルを使用させないといったように0か100の対応となってしまうだろう。また、近づく、手を繋ぐといった行為も徐々に近づく、徐々に手を繋ぐといった微妙な距離の調節は集団保育の限られた時間や環境の中では対応しづらいと考えられる。そのため「強要しない」というカテゴリーにこのような違いが見られるのではないだろうか。

次に、触覚過敏や視覚・聴覚過敏のある幼児を含めた気になる子が在籍するクラスを運営していく際の困難についてである。この質問項目のカテゴリーでは「活動の進行」が大きな割合を占めている。障害のない幼児が多く在籍する保育園において、気になる子その中で過敏さを持つ子に対して個別に対応するには限界があり、個別対応と集団での活動を進めるといことの間で葛藤が起こるのではないだろうか。集団保育を成立させるために生まれる困難を解決するためには職員配置が重要となっ

てくると考えられるが、「職員体制の限界」とあるように職員体制や職員数が十分でないという現実がある。限られた職員のなかでどのように職員を配置するのかということがこの「活動の進行」を解消するためにも大切になるのではないだろうか。

最後に、KHcoderの結果より、触覚過敏においては、環境にアプローチするものが少ないのに比べ視覚・聴覚過敏ではそれが多く見られる。触覚過敏では「一人担任」「クラス」そして「集団」といった対象児を取り巻く環境に関する単語であるが、視覚・聴覚過敏では、「事前（に伝える）」「話（をする）」など対象児に直接アプローチする単語となっている。同じ感覚過敏であっても、感覚過敏の種類によって保育に対して抱く困難感は異なるものだということが分かった。

5. おわりに

本研究では、感覚過敏、特に触覚過敏のある幼児の保育・子育てに関する現状を把握し、そういった幼児の保育者の困難感を明らかにすることを目的として行った。自由記述の分析から、触覚過敏と視覚・聴覚過敏の間で、主に環境へのアプローチに関する違いがみられた。これは、感覚過敏の特徴や主な対処方法からの違いだと考えられるため、今後感覚過敏のある幼児の保育を考える際には、その感覚過敏の特徴を考慮して考えていく必要があることが示唆された。

文献

- 1) 木原久美子:「気になる子」の保育をめぐるコンサルテーションの課題—保育者の問題意識と保育対処の実態をふまえて—, 帝京大学文学部教育学科紀要 31, 31-39, 2006.
- 2) 日高希美・橋本創一・秋山千枝子: 保育所・幼稚園の巡回相談における「気になる子どものチェックリスト」の開発と適用, 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 59, 503-512, 2008.
- 3) Bromley J, Hare DJ, Davison K, et al :Mothers supporting children with autistic spectrum disorders, social support, mental health status and satisfaction with services.autism, 8, 409-423, 2004.
- 4) 高橋智・増渕美穂: アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究: 本人へのニーズ調査から, 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 59, 287-310, 2008.
- 5) 前田泰弘・小笠原明子: 保育園における幼児の気になる行動と身体感覚の偏倚の関連性, 東北福祉大学研究紀要 35, 147-155, 2011.
- 6) 岩永竜一郎: 自閉スペクトラム症の感覚処理の問題への支援, 発達障害研究 37, 4, 334-341, 2015.
- 7) 太田篤志: JSI-mini 日本感覚統合インベントリー開発プロジェクト, 2010.
URL: jsi-assessment.info/index.html